

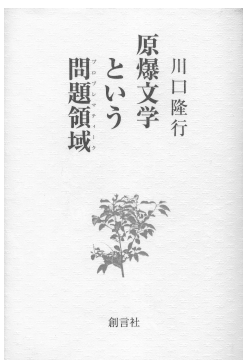
特集

# 原爆文学研究への展望

——川口隆行『原爆文学という問題領域』を視座として

原爆文学研究会の会員である川口隆行の著書『原爆文学という問題領域』が二〇〇八年四月、創言社より刊行された。本書の刊行を受けて執筆された四本の書評論文を掲載する。

高野吾朗・長野秀樹・Roberta Tiberiの論は、第二五回原爆文学研究会（二〇〇八年九月一四日・於九州大学）で開催したミニ・シンポジウムにおける基調報告に基づくものである。川口論から八つの主要キーワードを抽出し、その戦略を俯瞰した上で批判を加えた高野論は、シンポジウムでの報告を再現している。



長野論は、自身の関心と川口論との接点と差異を探ったシンポジウムでの報告に、メディア論的な視点からの考察を加筆したものであり、Roberta Tiberi論は、川口論と「原爆児童文学」というジャンルの成立過程を接



シンポジウム報告者と応答者〔左から 高野吾朗・長野秀樹・Roberta Tiberi・川口隆行〕（撮影：上村周平）

続させて分析することの必要性を指摘したシンポジウムでの報告に、漫画／映画『夕風の街 桜の国』への考察を加え執筆されたものである。

一方、柳瀬論は、当初より本誌に投稿するために書かれたものである。

それぞれ成立の経緯に違いはあるが、「原爆文学」の可能性と限界を広く考究した川口論を叩き台とし、新たな思考の次元を切り開こうとする点は、どれも共通しよう。

「原爆文学研究への展望」に資すること、さらには「原爆文学研究からの展望」ともなりえることを願い、本特集をお届けする。